「神の死」の経済的帰結

白井　聡

本稿は，経済学説史を近代精神史の視角から考察する。

a　古典派経済学

古典派経済学はリカードによって大成されたが[1]，彼はその主著『経済学および課税の原理』において，価格の理論（労働価値説），賃金の理論（賃金の生存費説），利潤の理論（収穫逓減の法則），稀少性の理論（差額地代論）を相互に連関する体系として展開した。

以上の要素を概説すると，まず，労働価値説とは商品の価値はそれに投じられた労働量によって決定されるという考え方である。彼は価値の本源的源泉（＝本質）を，スミスよりも明瞭に人間の労働に定めた。人間の労働を価値の本質として据えるということは，ある意味で人間中心主義の宣言であったが，問題はこのような人間中心の世界はいつか成長を停止せざるをえないと彼が考えたことである。このことの根拠は，収穫逓減の法則にある。この議論を概説すると，資本の蓄積の進行は，労働需要の上昇を生じ，賃金は増加する。賃金が上昇すると人口は増加し，それによって穀物の需要は増加する。するとそれまで耕作されていなかった劣等地に耕作が拡大するが，このとき優等地をめぐって資本家の間に競争が発生し，地主への地代が生じる（差額地代論）。地代が上昇することは資本家が手にする利潤の下落を意味し，人口が増加する限りは劣等地への耕作は拡大し続けると考えられるので，地代は上昇し続け利潤の下落もまた継続する。そして，利潤が最終的にゼロに達するということは資本の蓄積の停止，経済発展がゼロの定常状態へ至ることを表す。「経済発展は不可避的に「自然の吝嗇」というカベにぶつかり，総収入に占める利潤部分を低下させて再投資をはばみ，成長の停止へといたるのである」[2]。ゆえに，この定常状態の実現を避けるために，リカードは生産性の向上と，外国貿易による安価な

農産物の獲得の必要性を唱えた。

上に見た資本蓄積とその限界という理論とともに，リカードが近代経済学に残した大きな影響は，彼がかの有名な「セー法則」を高く評価し，それを経済学に定着させたという点に求められる。「セー法則」とは，J.B.セーに因んだ「供給はそれ自らの需要を創り出す」という命題に約言されるが，この理論によれば，即座に［供給＝需要］という等価関係が導き出される。労働価値説を主張するリカードにとっては，生産物の価値とは即，労働による価値の実現であって，生産物が購買されるということは，生産物に対して生産物が対置されるということ［生産物＝生産物］を表し，この等式は即座に生産物に体現された［労働価値＝労働価値］でもあり，それは内在的な価値に基づく「自然価格」による交換にほかならない。だが一方で，同時に価格は市場における需要と供給のバランスによっても決定される（「市場価格」）[3]。であるとすれば，どちらの価格が「真の価値」を表現しているのか決定できないという二律背反に陥るかのように思われるが，それを暗に解決しているのが「セー法則」なのである。すなわち，この法則が貫徹する世界においては，過剰あるいは過少な供給，同じく過剰あるいは過少な需要による価格の暴騰あるいは低迷という現象は，例外的には起こりえるとしても基本的には両者の量は均等であるがゆえに，その可能性が根本的に排除されている。したがって，極論すれば市場による価格の決定という要素はこれを無視することができるのであって，価格は労働価値の体現としてみなすことができる。そのときには，表面的「現象」を拭い去った「本質」としての［価値＝労働量］というきれいな等式を手にすることができる[4]。

このように極めて深くリカードの体系が「セー法則」に立脚しているということは，当然われわれが先に見た彼の資本蓄積の理論構造にも関連している。すなわち，資本蓄積を挫折させるのは最終的には「自然の吝嗇」であった。自然発生的な生産物のみで生きて行くには人間の数が余りに大きくなったために，人間は自然に対して働きかけ（＝労働），その果実を増やさねば生きて行けない。それゆえにこそ「労働」は極めて重要であり，すべての価値の源泉とみなされねばならなかった。自然は稀少であるがゆえに人は労働するのである。リカードの言葉「穀物は地代が支払われるから高いのではなくて，穀物が高いから地代が支払われるのである」[5] は，このような意味で理解しなければならな

い。穀物は大地から生ずる自然の果実であって，自然にはその限界が刻印されているがゆえに，その果実には価値がある。そして，「セー法則」もまた，稀少性を前提としている。供給された生産物が全て需要される世界とは，ひとえに諸生産物が総体として稀少であることを前提するものである[6]。だから，二つの等式［価値＝労働量］と［供給＝需要］は，稀少性をその共通の基盤としていることがわかる。

自然の稀少性ゆえに資本蓄積は挫折し，経済は最終的には定常状態へ移行せざるをえないというリカードのペシミスムは古典派経済学に共有されたが，しかし，現実には資本主義の制度の下で経済発展が終わり，定常状態の到来が実際生じたわけではもちろんない。それは，定常状態の到来が何らかの方法で回避されてきたということだ。西川潤によれば，それは二つの方法によってなされたのであり，ひとつは機械の導入を中心とした生産性の向上であったが，それはマルクスによれば定常状態の到来を防ぐどころかそれを促進するものである[7]。したがって，もうひとつの道，すなわち植民地の獲得こそが本質的なものであった。「つまり資本は，無限に生産物を生み出し得るものではなく，国内の土地が限られている以上，収穫は逓減し，利潤率はゼロとなる。これを救う道は外国の市場を開発して資本に新しい用途を与えてやる以外はない」[8]。こうして十九世紀の自由主義から理論的にも，帝国主義が準備される。

b　新古典派経済学

1870年代にみとめられる新古典派の誕生は，限界革命を経て一般均衡の理論の登場をもって画される。限界革命とは，アダム・スミス以来の「価値のパラドクス」を解決したものとされている。これを遂行したジェヴォンズ，ワルラス，メンガーは，リカードがついに解くことのできなかった客観的な「不変の価値尺度」とは何かという客観性の領野で設定された価値の問題を，価値は主観的に決定されると考えることによって克服した。すなわち，リカードの労働価値説は，「自然の吝嗇」という客観的な稀少性から生ずるものであることをわれわれは確認したが，メンガー，ワルラスにとって財は，それが人間にもたらす主観的効用によって価値を持つと考えられたのである。よって，彼らにあっては稀少性は主観性から捉えられている。

次に，新古典派のもうひとつの達成である一般均衡理論を見てみよう。ここでワルラスの一般均衡理論について簡潔に言えば，それは完全競争という仮説的な制度の下において，売り手の供給と買い手の需要によって，すべての経済主体にとっての限界効用が最大になる均衡価格が決定されるという理論であった[9]。供給量と需要量による価格決定という考え方自体は何ら新しいものではないが，ワルラスの新しさは一般均衡の条件を経済諸変数間の関係を表す一連の数学的解法によって示したことにある。商品，労働，貨幣のすべての市場において需要と供給が等しくなった状態を指す新古典派の一般均衡の概念は，ある一点において合理的な個人が最も効率的，合理的に行動することによって，稀少な資源が極大の満足と利益を実現するよう用いられると想定するものである。

以上をまとめると，古典派から新古典派への移行は，断絶というよりもむしろ連続的であることが見て取れよう。なぜなら，主観的な欲望満足から財の価値を規定しようとする理論は彼らの出現以前から存在したし，限界概念も既にリカードの差額地代論に現れていたからである。また一般均衡理論は，自由な市場経済の予定調和への信仰という古典派的思考の一面を斥けるどころではなく，その予定調和が成り立つ条件を数学的に証明するという形で精緻化したものにほかならなかった。そしてそれが前提する人間像は，ベンサム風の功利主義的個人像であった。

こうしてみると，あたかも新古典派経済学は古典派経済学の単なる再編成であったかのようであり，両者の間には何ら根本的な断絶はないかのようである。だが，ここにはひとつの決定的な差異がある。それは，新古典派は一部の学派を除いて，資本蓄積の理論を欠いていることである（ゆえに彼らは帝国主義の問題を論じなかった）。そこでは，一般均衡状態という一意的に確定された静態的な定常状態――それはリカードが，避けたいが避け難いものとして描いたものであった――が，中心概念となっている[10]。そこでは全ての商品の需給が均衡しているので，（少なくとも長期的には）それは「無利潤論」であり，経済は年々歳々同一の循環を繰り返す。したがって，一般均衡点においてはこれ以上の資本蓄積は事実上不必要になっているのである。このことはすなわち，総体としての財の稀少性に代わってその豊富さが措定されていることを意味している。だから，ワルラスにおいて典型的に見出しうるように，リカードにお

いて客観的であり，それゆえに人間の生命を脅かすものであり，人間をして労働に赴かせしめたあの稀少性は，いまや個人の気ままな移ろいやすい欲望にとって感じられるものにすぎない。限界革命による価値の主観化と，一般均衡理論との親和性は明らかであろう。価値が主観的なものにすぎないものであるためには，一般均衡点において効用が極大化されている，つまりは稀少性から（理論的には）逃れていなければならないのである。

かくして財の豊富さを暗黙理に想定した一方で，新古典派は同時に「セー法則」をも暗黙理に想定した[11]。そして，われわれが先に見たように「セー法則」は，財の稀少性を前提とするものであった。つまり，ここに矛盾がある。かくして新古典派経済学は，経済の現実から乖離しているとして，過剰生産の問題についてはマルクス主義経済学から批判され，過剰な労働力すなわち失業の問題についてはケインズから批判されることとなる。

c　シュンペーター

リカードについて見たように，労働価値と労働価値が等価に交換されるのは，稀少性に基づいていた。この前提を曖昧な形で受け継いだ新古典派経済学は，成立するや否や，上に見た矛盾のゆえに経済学的等価関係，すなわち市場における［供給＝需要］という「セー法則」の図式を維持することの危機を迎えてしまう。ケインズによれば，多くの経済学者は「セー法則」を否認したが，それにもかかわらず彼らはそこから抜け出してはいなかった，という[12]。かくして，理論と現実の矛盾があらわとなるが，このような状況から出現した思考の中にシュンペーター，ケインズの理論が含まれる。

まずはシュンペーターの議論を検討しなければならないが，言うまでもなく，彼の理論の精髄はその「新結合」の理論にある。彼は，それまでの経済学において漠然ととらえられていた「資本家」と「企業者」を明確に分離し，新結合を遂行する者のみが資本主義を発展させる「企業者」であるとした。新結合とは具体的には，新しい財貨の生産，新しい生産方法の導入，新しい販路の開拓，原料あるいは半製品の新しい供給源の開拓，新しい組織の実現，[13] である。

岩井克人が言うように，シュンペーターの「新結合による経済発展」の理論は，マルクスの「特別剰余価値」の議論を敷延したものとしても理解できる[14]。

特別剰余価値とは，マルクスが相対的剰余価値の一部として展開したもので，それは「生産様式の改良」によってもたらされる。すなわち，あるひとりの資本家が何らかの技術革新に成功して，製品を他の資本家よりも安く生産することができるようになった場合，彼は市場の価格（つまり，旧来の生産様式で生産された生産物の価格）と全く等しい価格でその製品を販売したとしても，生産コストは他の資本家に比して低いために，超過利潤を手にすることができる。しかし，このような新しい生産様式は即座に他の資本家によって模倣され，市場全体における生産のコストは一般に低下するであろうから，この剰余価値は期限付きの「特別」なものである[19]。

シュンペーターの言う新結合の理論は，この特別剰余価値の獲得という運動を「特別」なものではなく，資本主義の常態としてとらえたものである。すなわち，投資の余地が減少した「成熟した」資本主義においては，新技術の開発のみがより高次の経済段階を切り拓くことができるということだ。さらに，この理論が含意することはそれのみではない。岩井が強調するのは，「産業資本による剰余価値創出の仕組みは，結局，ノアの洪水以前の資本の形態である商業資本主義の利潤創出の仕組みと論理的に同型」[18] であるということだ。すなわち，最もわかりやすい利潤創出の仕組みは，遠隔地貿易によるものであるが，その方法は「安く買って，高く売る」ということに尽きる。「安く買って，高く売る」からといって貿易商人が詐欺師や強盗ではないのは，彼らがそれぞれの交換において，あくまで「等価」に商品を交換するからである。等価交換しか行なわれないのにもかかわらず，そこには時に莫大な利潤が生まれるのは，ある商品がある場所では安価で，また他のある場所では高価であるという，価値体系の空間的な差異に基づく。新たな生産様式を導入することによって，生産費の安い商品を新たに生産し，それを従来の生産様式で生産された商品によって構成されている価値体系の中に流通させるという新結合の理論は，利潤を生む源泉である「価値体系の差異」が生ずる場所を，古来の空間から時間へと移動させたものにほかならない。つまり，未来の価値体系を次々に先取りすることによって，従来の価値体系との差異を創り出すことによって利潤が生まれるのである。もちろん，マルクスが「特別」と言い，シュンペーターも指摘するように，このような運動を無際限に繰り返さない限り利潤は失われてしまう。ゆえに，シュンペーターの描く資本主義像には，価値体系を次々に破壊し，そ

れを新しいものに塗り変えて行く（「創造的破壊」），という価値創造の機構がビルトインされている。

d　近代経済学と「神の死」

われわれはここにひとつの断絶を見て取ることができる。それは，シュンペーターが「神の死」を半ば意識的に遂行した最初の経済学者であったということである[17]。それはすなわち，従来の経済学が，既に存在する価値がいかにしてあるかを問うた，つまりその本質が何に由来し，それがいかにして現象し，いかにして蓄積するのか等々を問い続けてきたのに対し，シュンペーターは価値について語るうちに，何時の間にかその領域を突き抜けてしまったということである。新結合による価値創造は，既存の価値体系に侵食し，それを破壊することによってしかなされえず，当然のことながら，新たにもたらされた価値体系もまたさらに新しい価値体系に呑み込まれる運命にある。したがって，すべての価値は生れるや否や，やがて生れる新たな価値体系によって解消されることを運命づけられている。かくして万物は流転する。そこでは，「真の価値とは何か」という経済学特有の形而上学（この形而上学を限界革命が斥けたとは言えない，なぜなら彼らは「それは効用である」と答えたのだから。また新古典派は一般均衡理論によって「価値の現象」が「価値の本質」と一致する点を求めるという実に形而上学的図式を持っていた）は成り立たない。価値体系そのものが変動すれば，価値の本質もまた変動するからだ。つまり，厳密を期して言えば，彼は価値の創造を「新たな価値の創造」に求めたのではなく，それを「新たな価値体系の創造」に求めたのである。彼が新古典派の一般均衡理論体系から出発したということは，同一の経済が際限なく繰り返される世界を前提としたということであり，そこでは利潤は生ぜず，価値を創造することは不可能である[18]。したがって，価値の創造をなすためには，価値体系を全面的あるいは部分的に創り変える方法しか残っていない。だが，既に述べたように新しい価値体系の導入による利潤の産出は，すぐに静態的均衡状態へと向かい，利潤は絶たれる。ゆえに，企業者は新結合を際限なく続けなければならない。

もはや，彼はかつての人々のように価値自体を問うていない，価値の秩序がいかにして生成されるのか，言いかえれば「天地がどのようにしてあるか」と

いうことではなく「新たな天地創造の過程」を問うているのだ。つまり，神のための舞台はない。してみれば，彼の不安に満ちた危惧，すなわち資本主義的企業経営は徐々に官僚化することによって新結合を生み出すダイナミズムを失い，社会主義が不可避的に到来するのではないだろうか[19]，というあまり的中しなかった予言は，「真の価値」という問題を棄却した，言いかえれば「神を殺害してしまった」というより高次の不安を密かに覆い隠すための，いわば「対抗的不安」あるいは「疚しい良心」にほかならない。新結合がなされなくなれば，価値体系は固定化され，したがってまた価値も固定化されるに違いないからだ。

だがしかし，シュンペーターがたったひとりで「神を殺害した」というのは本当だろうか。ここで近代経済学の歴史をアダム・スミスから振り返って見てみるならば，それはのっけから「神の死」以後の思想ではなかったか。諸個人が全く利己的にのみ行動するにもかかわらず，そこに予定調和が存在するのだとする「見えざる手」という言葉が，「神の目えざる手」として解釈されてきたという事実は，深く考察する必要がある。スミスにあっては，神は存在するとしても，それはあくまで「見えない」ということは決定的ではないのか。経済学者達は，「スミスの学説が単なる自由放任の学説であると曲解されている」という不平をこぼし続けてきた。彼らの嘆きと啓蒙の努力にもかかわらず，こうした「誤解」が一向に後を絶たないのは理由のないことではない。神が不可視であるとすれば，予定調和によってその存在の痕跡を，「見えざる手」の痕跡を確認したいという宗教的・神学的な衝動に，これらの「誤解」は憑かれているからだ。続いで，スミスの学説をより精密に体系化することによって労働価値説を一貫させたリカードの思想の要諦とは，神の恩寵を失った人間は死の脅威に耐えつつ労働せねばならぬということにほかならない。

こうして考えると，スミスからシュンペーターまでの経済理論の変遷は，「神の死」が宣告され，それが引き受けられ，内面化され，ついには「神の死」以後の世界に人間が対処するようになる過程として理解することができる。

先にも触れたワルラスの一般均衡理論は，予定調和という不動の世界の存在可能性を数学的に証明しようとしたものにほかならない。換言すれば，神は見えないので，その代わりにその手が確かに働いていることを彼は証明しようとしたのである。ゆえにそれは多分に神学的であった。しかし，それでもなおそ

れは「神の死」の確認を促進したものだと言わねばならない。というのも，新古典派の成立こそが経済学を「純粋科学」化したという歴史を考える必要がある。古典派の時代には，経済学は「政治経済学」(political economy) であり，それは道徳哲学や経済政策理論の一部であったのに対し，新古典派は経済学を自然科学と考え，「純粋経済学」(economics) を確立した。つまり，古典派は経済秩序の自律性を自明視しなかったのに対して，新古典派はその完全な自律性を前提したということだ。スミスが主張したことは，経済領域においては「神は見えない」ということであったが，そのように認識された経済領域の自律性が強調されたということは「神は見えない」ということがますます深く確信されたということにほかならない。一般均衡点の存在探求という実に神学的な情熱は，この秘められて深まった絶望を補完し，それと対をなす。神が不可視であることが深く認識されればされるほど，神の手の痕跡の確かな存在をますます力強く証明しなければならなかった。

e　貨幣の理論

このように引き裂かれたふたつの衝動は，その必然性を理解することはできるものの，やはり論理的には矛盾であったと言うほかない。その矛盾が最も劇的に現れているのが，貨幣に関する議論である。

スミス・リカード以来，多くの経済学者によって貨幣は単なる純粋な媒介としてみなされてきた。一定の労働量と労働量とが，それによって表現された商品形態が全く異なっているにもかかわらず「等価物」とみなしうるのは，そこに体現された労働価値が等しいのと同時に，そのような等しい価値を正しく反映することのできる媒介が存在すると考えられているからである。そしてその媒介とは，言うまでもなく，貨幣である。この「透明な媒介としての貨幣」という思考は，綿々と新古典派経済学にも受け継がれてきた。貨幣が価値を正確に反映する透明な媒体であるのにかかわらず，諸貨幣が存在し，各々が異なった比率で交換されるのはなぜなのか。この難問は，もちろん貴金属中の貴金属である金の存在が解決する[20]。金兌換される貨幣（後には紙幣）は，それ自体は鉄や銅の塊（あるいは，ただの紙）にすぎないのに，それを用いて諸々の支払いを行なうことができる。諸貨幣はそれぞれが，金の分身であり，超越した

価値としての金との関係（＝金との交換可能性）によって自らの価値を保証することができた。こうして，貨幣の価値が客観的に確立されてしまえば，［生産物＝生産物］，［労働価値＝労働価値］という諸等式が成り立つ条件の客観性もまた確保される。

このようにして貨幣は，「交換の媒介」と「価値尺度」という機能に限定される。そうなれば，古くからある貨幣数量説が，近代的な装いを持って成り立つことも理解できる。例えば，フィッシャーによって表明されたＰＴ＝ＭＶ（Ｐは一般物価水準，Ｔは取引量，Ｖは貨幣の流通速度，Ｍは貨幣数量を表す）は，Ｐ＝（Ｖ／Ｔ）Ｍと書き表すことができ，これによって物価水準Ｐは，貨幣数量Ｍに依存することになる[21]。

このような貨幣理論に先駆的に批判を加えたのがマルクスであり，また後にはケインズであった。注意しなければならないのは，いずれの批判もあの「セー法則」を批判することによってなされたということだ。

マルクスは「どの売りも買いであり，またその逆でもあるのだから，商品流通は，売りと買いの必然的な均衡を生じさせる，という説ほどばかげたものはありえない」と言う。なぜなら，「だれも，自分が売ったからといって，すぐに買わなければならないということはない」[22] からである。仮に，すべての商品の売り手が同時に商品の買い手となる（便宜的に彼らは貨幣を用いるかもしれないが，このような状態では事実上物々交換が行なわれていると考えてよい）ならば，供給されたすべての生産物は同時に需要されるので，［供給＝需要］という「セー法則」が成立する。また，その場合の物価水準は，先ほどの公式，Ｐ＝（Ｖ／Ｔ）Ｍで表され，貨幣数量説も妥当する。しかし，マルクスが見抜いたのは，貨幣という特殊な商品に対しては「セー法則」が妥当しないことである。すなわち，売りによって獲得された貨幣は，そのすべてが即座に買いに投ぜられはせず，しばしばそれは退蔵される。つまり，貨幣は「交換の媒介」，「価値の尺度」という用途以外にも用いられるのである。これにより「売りと買いの分離」が生ずるのであり，生産物の供給の超過，すなわち「恐慌の可能性」をマルクスはここに見出した。そして，後にケインズも流動性選好に基づく貨幣愛を取り出すことによって，「セー法則」を否定し去ることになる。

ところで伊東光晴によれば，新古典派経済学は物価水準に関して，先に見たような貨幣の供給量が物価水準を決めるとする貨幣数量説と並行して，価格の

平均は諸価格によって決まるという需給決定の理論を持っており，それらは矛盾していなかった[23]。「神の死」をめぐって引き裂かれた経済学の思考の一端が，これほど端的に表れている事例はほかにない。なぜなら，純粋な古典的貨幣数量説を取るならば，価値の体系の起源は諸貨幣の背後に控えている超越神としての金，あるいは貨幣を流通させる強制力を持っている神の代理としての国家に帰せられるが，需給決定の理論を取るならば，価値の体系の根拠を諸商品間に成り立つ完全に自律的な秩序（＝「神の見えざる手」）に帰すことになるだろう。しかし，「見える神」と「見えざる神」という，ふたつの神を同時に信じることはできない。それでも彼らはそうしようとした。ゆえに，彼らは貨幣において「セー法則」を導入するという非現実的な前提を置いたのである。すなわちフィッシャーの議論を見ればわかるように，貨幣の供給と需要が一致すること（売りと買いが分離しない「セー法則」の世界）を前提に，貨幣数量説が組み立てられたわけだが，それの含意するところは，需要と供給の均衡的一致という不可視の神に基づいて，貨幣発行者の権威あるいは超越的価値としての金という可視の神が支配する秩序を構成するということであった。つまるところそれは，不可視の神が可視の神を根拠づけるという論理構造である。こうして，一度貨幣数量説が確立されれば，物価水準Pは貨幣数量Mによって決定されるから，今度は貨幣の背後にある可視の神が価値体系という不可視の神を根拠づけるという逆の証明がなされる。これをまとめて言えば，可視の神があるのは不可視の神の存在ゆえであり，不可視の神があるのは可視の神の存在ゆえであるという循環論法を用いることによって，不可視の神と可視の神のいずれが真の神であるのかというラディカルな神学的問題は，巧みに消去されるということである。

f　「神の死」の経済的帰結

このように見てきた上で，近代経済学の成立と変遷を総括すれば，次のように言えるだろう。すなわち，神が不可視になることによって殺害され，恩寵を失った人間はまずは労働へと赴いたが，それによる生産物が相対的に豊富になると，財の豊富な世界という人工の恩寵（厳密に言えばそれは恩寵ではない）の世界を証明しようとした。しかし，「神を殺害してしまった」という記憶に

伴う「疚しい良心」は，調和の世界にひとつの裂け目を穿っていた。それが，ここまで見てきた貨幣の理論の本質である。そこでは依然として超越した神のごとき価値が保たれている必要があった。しかし，スミス以来実際は「神は死んで」おり，貨幣の理論にとり憑いた神とは，実は殺された神の亡霊にほかならない。現に，スミスの経済学が「科学的」な近代経済学の始まりとされたのは，彼が，富の源泉を貨幣から生産物へと移行させることによって，光り輝く貴金属に魅せられた重商主義・重金主義の「迷妄」を取り払ったと考えられたからであった。ここでも既に「神は殺害され」，亡霊となるほかなくなっている。だが，それは亡霊であるがゆえに退散させることが困難であった。

それを物語る現実の制度が「金本位制」である。そして，シュンペーター・ケインズの時代に，金本位制は崩壊して行く[24]。

金本位制とは，周知のように，各国の貨幣が金兌換の可能性を持って発行されることを前提に，外国為替の安定を保つための制度である。それが金貨本位制，金地金本位制，金為替本位制のいずれを取ろうとも，その本質は同じであり，金本位制とは諸国の貨幣が超越した価値である金を参照することによって，各々の価値を確認することができる体制である。外国貿易の規模が大きくなった時には外国為替の安定が不可欠であるから，貿易の利便性のためにこの制度は要請されたと言える。この制度が確立されると，「貿易の不均衡は金の輸出入による通貨の増減で自動的に調節されるので，均衡回復のために国家が輸出入を統制したり，為替管理をする必要はない。金本位制下の国際取引きは当然自由貿易になる」[25]。

カール・ポランニーは金本位制を「肉体では受け容れるが精神では拒否するという悪魔的な信条」[26] と呼ぶ。そして，この「信条」は危険なものである。なぜなら，金による裏付けを持った「商品貨幣」あるいは「正貨貨幣」は，その発行者の金準備という限界以上に発行することはできないからだ。だから次のような事態が生じる。

> 生産と取引が拡大しても貨幣量の増加を伴わないとすれば，価格水準が低下するに違いない。これが，まさにわれわれの念頭にある典型的，破壊的なデフレーションである。貨幣不足は，十七世紀商人社会の恒常的かつ深刻な不満のたねであった。取引量が膨張する際，金属正貨を使用していることで

必ず被らなければならないデフレーションから取引を守るため，紙券貨幣が早くから生みだされていた[69]。

先に論じた貨幣の理論における神学的問題をここにも見て取ることができる。すなわち，金属正貨と紙券貨幣は両者ともに必要であったのだが，前者はそれ自身が貴金属であるという，目に「見える神」であった。これのみが流通する世界では，全ての商品の価値は金属正貨の量で表現されねばならず，貨幣数量説が成り立つ。だが，総体としての財が増えてしまった場合に，それらの価値を金属正貨が全て表現することができなくなってしまう。そうなれば，流動性の不足によるデフレが避けられないので，紙券貨幣が必要になる。こう考えれば紙券貨幣とは，商品と貨幣との需給法則という「見えざる神」に導かれて現れるものである。

では，十九世紀の国際システムはどちらの神を信じたのか。またもやその答えは，両方の神という欺瞞的なものである。ポランニーいわく，「十九世紀の事情では，外国貿易と金本位制は，国内取引の必要性をしのぐ，議論の余地のない優先権を有していた。金本位制が機能するには，為替相場の下落の恐れがあるときには，必ず国内価格が下落しなければならなかった」（傍点引用者）[70]。金本位制とは，金を「真の価値」として認めるということでは，「見える神」を信仰していることは明らかだが，その信仰が時に国内でのデフレーション（不況・失業）を引き起こすという犠牲を払ってまで護られなければならないのは，自由放任主義的な自由貿易を行なうためである。つまり，「見える神」を信仰するのは，実は「見えざる神」を信仰するためであるという，シニカルな二重信仰がここにはある。ゆえに，この信仰は「悪魔的」なのだ。

だが，この矛盾的な信仰は，先に見たような循環論法で矛盾を解消することができない。なぜなら，ここでは金への物神崇拝よりも，その信仰の目的たる「見えざる神」への信仰の方が明らかに優越しているからだ。したがって，可視の神によって不可視の神を証明する必要は本来ないはずである。しかし，神の亡霊はここにおいて蠢き始める。

十九世紀後半に確立された国際的金本位制度は，第一次世界大戦によって崩壊する。英国を例に取れば，国土が荒廃した戦後には金本位制度を維持することができなくなっていた。しかし，実際には，あまりに犠牲の大きかった旧平

価による金本位制への復帰が行なわれたのである。この政策が実行された目的や動機，またその失敗の原因については，諸説があろう。だが，いずれにせよ明かなことは，かつての安定した金本位制は二度と復元されなかったということである。「再建金本位制の期間は長めに区分しても，戦間期20年の3分の1にも満たない」[29]。ゆえに，金本位制の再建は非合理的であったと結論せざるをえない。それにもかかわらずそれが行なわれたという事実が物語るのは，人々が「見えざる神を支えるために虚構として措定した神」，言いかえれば「神を殺害したことを正当化するために生かしておいた神」というまさに神の亡霊に必死にしがみついたということである。

この帰結を見通していたかのように金本位制に批判を加えていたのがケインズであった。ケインズ理論の全体像とその複雑な貨幣理論についてここで詳細に述べることはできないが，疑いなく指摘できるその要点とは「国内通貨と国際通貨の供給量を人為的に管理すること」，つまりは管理通貨制度であった。彼の貨幣理論は『貨幣改革論』から『貨幣論』そして『一般理論』へと，時事問題に対応しつつ進化して行くが，管理通貨制度のエッセンスは「社会全体の通貨量が金という自然物によってコントロールされるのにかわる，知性に基づくコントロール」[30]と言えるだろう。ここにおいて，ついに近代経済学の「神の死」の物語は終わりを告げると言ってよい。もはや，神の亡霊としての物神すら必要ないということが宣言されたのである。

だが，ひとつの疑問が残る。なぜケインズの時代には「疚しい良心」に囚われずに「神の死」を清算してしまうことが可能だったのだろうか。種村季弘は，あの悪名高きジョン・ローの「システム」とケインズ以来の管理通貨制度の構造的親近性を指摘しつつ，興味深い議論を展開している。

> ローのシステムは早すぎたのだろうか。（中略）おそらくきっかり七十年早すぎたのだ。という意味は，すべての金属貨幣を紙幣に代行させるには，王の存在を抹殺しなければならないからであり，フランス王が王座を占めている限り，紙幣通貨に対する金と銀の反攻は必然だったのである。（中略）国王がギロチンで抹殺された一七八九年の大革命の後でなら，彼の政策はおそらく致命的な反動攻勢にさらされずに済んだものに相違ないのだ。何故か。
>
> （中略）金が足りないから金を作るという宮廷錬金術師の作業は，至上価

値たる金が金そのものでなければならぬという，つまるところ金のアイデンティティー追求が前提されており，すでにふれたように，それは王権のアイデンティティー追求のアナロジーである。王の血は王家の血統に連なる血でなければならない。（中略）基本的な法則は一致の法則である。金が金であるように，王の血は王の血でなければならぬ[61]。

大革命による王殺しという実にわかりやすい「神の死」以降の世界とは，出自の怪しい紙幣が流通することが可能な世界である。必然的に世界は不確定なものとなり，「すべてのものが大地を離れて偶然性の大海に漂いはじめる」[62]。ただし，われわれが見てきたように，経済学における「神の死」と貨幣に関する議論との関係，そして「殺害された神」は亡霊となって生き続けたことを考慮すれば，現に紙幣が流通していようとも，このような不確定な神なき世界をそのまま受け容れるということは人間にとって決して容易なことではなかったことがわかる。金本位制の起源は，ナポレオンを倒した英国がその翌年，1816年にソヴリン金貨を発行したことに求められるが[63]，すでにこのことが示唆的である。なぜなら，ナポレオンとは大革命という「神の死」以後の不確定な秩序から出現した「偽の王」にほかならず，それが倒された時には当然「真の王」が復位しなければならなかった。しかし，一度「神が殺害され」た以上，もはやかつての世界を取り戻すことは不可能だった。それでも，このことを納得するには少なからぬ時間が必要だったのである。

---

(1)　筆者がアダム・スミスではなくリカードから経済学史を叙述するのは，ミシェル・フーコーの見解に従うためである。フーコーによれば，スミスは十七・十八世紀的な「古典主義時代」の住人であるのに対し，リカードは十九世紀から二〇世紀の人間，すなわち「近代人」である。この問題に関するフーコーの見解は，『言葉と物』渡辺一民・佐々木明訳，新潮社，1974年，の第六～八章を参照せよ。ただし，後述するように，スミスにも明瞭な近代性をわれわれは見出しうる。

(2)　西川潤『経済発展の理論』（第二版），日本評論社，1978年，40頁。

(3)　このことはアダム・スミスによって，「価値のパラドクス」としてすでに示唆されていた。A．スミス『国富論』Ⅰ，大河内一男監訳，50頁を参照せよ。

(4)　D．リカード「経済学および課税の原理」：『デイヴィド・リカードウ全集第Ⅰ巻』堀経夫訳，雄松堂書店，1972年，第四章を参照せよ。このような価値・価格に対するヴィジョンを，リカードは基本的にはスミスから継承している。A．スミス，前掲書，第五章を参照せよ。

(5) D．リカード，前掲書，88頁。
(6) セーやリカードが生きた時代には，総体としての財の稀少性に基づく「セー法則」は確かに妥当していたのかもしれないが，それが現実性を失ったにもかかわらず，長きに渡って経済学を密かに束縛し続け，その最終的清算はケインズを待たなければならなかったと森嶋通夫は述べている。『思想としての近代経済学』，岩波新書，1994年。
(7) K．マルクス『資本論』岡崎次郎訳，大月書店，国民文庫，1972年，第一分冊，363頁。
(8) 西川潤，前掲書，81頁。
(9) L．ワルラス『純粋経済学要論』久武雅夫訳，岩波書店，1983年，第四版への序文。
(10) 西川潤，前掲書，159頁。
(11) ワルラスにおいて「セーの法則」がどのように取り入れられ，それがどのような矛盾を生んだかについては森嶋通夫の前掲書，第一部・三を参照せよ。
(12) J．M．ケインズ『(普及版) 雇用・利子および貨幣の一般理論』塩野谷祐一訳，東洋経済新報社，1995年，フランス語版への序。
(13) J．A．シュンペーター『経済発展の理論』塩野谷祐一・中山伊知郎・東畑精一訳，岩波文庫，1977年，(上巻) 183頁。
(14) 岩井克人「遅れてきたマルクス」：『ヴェニスの商人の資本論』ちくま学芸文庫，1992年，所収を参照せよ。
(15) K．マルクス，前掲書，第二分冊，161頁。
(16) 岩井克人，前掲書，102頁。
(17) シュンペーターの学説へのニーチェ主義の影響も指摘されている。例えば，森嶋通夫の前掲書，60-61頁を参照せよ。
(18) J．A．シュンペーター，前掲書，(上巻) 第一章を参照せよ。そこではワルラス体系が措定する世界が記述されている。
(19) J．A．シュンペーター『資本主義・社会主義・民主主義』中山伊知郎・東畑精一訳，東洋経済新報社，1962年，を参照せよ。
(20) ここでは，管理通貨制度が世界的に導入される以前のパラダイムに基づいて筆者は議論している。
(21) 伊東光晴『ケインズ』，講談社学術文庫，1993年，137-138頁。
(22) K．マルクス，前掲書，第一分冊，202-203頁。
(23) 伊東光晴，前掲書，138-139頁。
(24) 金本位制が最終的に廃止されるのは，1971年のニクソン・ショックによって，金と米ドルとの交換が停止される点であるから，この時点までは金本位制が継続していたと考えるべきである。しかし，その決定的な失墜は第一次大戦の時代に始まるととらえられよう。
(25) 鯖田豊之『金（ゴールド）が語る20世紀』，中公新書，1999年，52頁。
(26) K．ポランニー『大転換』吉沢英成・野口建彦・長尾史郎・杉村芳美訳，東洋経済新報社，1975年，32頁。
(27) K．ポランニー，前掲書，262頁。
(28) K．ポランニー，前掲書，263頁。
(29) 石見徹『国際通貨・金融システムの歴史』，有斐閣，1995年，54頁。
(30) 伊東光晴，前掲書，276頁。
(31) 種村季弘「贋金の使い方」：『ぺてん師列伝』，青土社，1982年，所収，300-302頁。
(32) 種村季弘，前掲書，303頁。
(33) 鯖田豊之，前掲書，47頁。